

埋蔵文化財調査室ニュースレター

特集 カマド—台所の歴史—

カマド（竈）とは、火を焚く周りを粘土や石などでドーム状に囲い込んだ加熱調理のための施設です。ドーム状の天井に煮炊き用の土器をはめこみ、住居の内側に開いた口から薪などの燃料を差し入れて燃やし、またそこから空気を送り込んで煙を屋外に流す工夫がしてあります。北海道では7世紀ころの擦文文化の開始とともに竪穴住居に作り付けられた厨房施設としてカマドが普及し、擦文文化が終わる13世紀ころに竪穴住居や土器とともに姿を消します。

北大キャンパス内（K39 遺跡・K435 遺跡）で発掘される擦文文化の住居址（じゅうきょし）にも必ずこのカマドが作り付けられています。擦文文化におけるカマドの登場と消滅は何を物語っているのでしょうか。本号ではキャンパスの地下に埋もれている台所の歴史の一コマを紹介します。



K39 遺跡恵迪寮地点（サクシュコトニ川遺跡）で発見された第1号住居址のカマド遺構（カマドの天井の掛け口に「甕（かめ）」と呼ばれる深鍋が掛けられたままの状態が発掘された希少例。1981-82年発掘。写真はイラスト矢印の方向から撮影。）

